

しなば、後の悔もはかりがたし、猪と申けた物は猛なる上に、松の脂を以て身をかため候故、箭もたつ事候はぬよしなれば、其心を武士の眼として、猪の目すかす事になん覺候、よからんうへには世のそしり人のへんえうと申事、御用心候へかしなんと云々、是一條禪閣兼良公の御作なり、本草綱目五十一ニ、野猪能與虎鬪、或云能掠松脂、曳沙石、塗身以禦矢云々、此文を以て書給ひし物ならん。

〔後拾遺和歌集十四〕題えらす

和泉式部

かるもかきふすゐのとこのいをやすみさこそねられめ〇ねられめ一かゝらずもがな

〔和爾雅六〕豪猪ヤマアラシ

〔書言字考節用集五〕山豕ヤマアラシ

〔本朝食鑑十一〕野猪〇中

附録 豪猪俗稱山阿良志、近世來自外國、而官家有畜之者、予平野必大往年得見之、其狀類猪而頭面稍短、細項背有棘鬣、長近尺許、怒則激發、如矢、本邦之人未得食之、

〔本草綱目譯義五十一〕豪猪 ヤマアラシ 和産ナシ

蕃國ノ産、古へ日本へ渡ル見セ物ニ出、本朝食鑑安永元年、紅毛人ジャガタラノ産ヲ持來ル、京師ニテミセモノニ出、エーヅルハール、コエヅルハルフトモ云、此ハ兔ノ如ニシテ耳ハ大ニアラズ、鼠ノ耳ノ如ク、頭ハ兔ヨリ細ク、體ハ毛長キ故ニ、兔ヨリ大ニミユル、毛長キ刺也、腹ハ常ノ獸ノ毛ト同ジ、見ラル、毛ハミナ刺ナリ、

〔兼葭堂雜錄二〕豪猪俗云、也末阿良之、山猪、蒿猪、獠瑜、鸞猪等の名あり、安永元年阿蘭陀より薩摩國へ傳來し、翌二年巳の春、浪華に來りて觀物とす、其形猪の如く、頭兔に似て色白し、身毛長く平くして、髮搔のごとく、恰も管を以て作し、莖を著たるが如し、身を奮ひ動かす時は、鳴音金具を打合すがごとし、毛の色白き中に、所々茶色の斑あり、實に奇異の獸なり、一説に、唐土南陽の深山に生